

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

平成24年2月29日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 次世代研究者育成センター

職名 特定助教

氏名 志田 泰盛

助成の種類	平成23年度 ・ 研究者交流支援 ・ 外国人研究者招へい助成		
招へいた研究者	所属・職名	ケーララ大学 東洋学研究所・写本図書館 プロジェクトアシスタント	
	氏名	Shaji Ponnappan Lalitha (シャジー P. L.)	
研究課題名	マラヤラム文字サンスクリット語写本読解研究		
招へい期間	平成 24 年 2 月 5 日 ～ 平成 24 年 2 月 17 日		
招へい成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ■ 無 □ 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	180,000 円	
	使用した助成金額	180,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	国際便航空券	150,000円
		日本国内交通費	30,000円

## 成果の概要（平成 23 年度 外国人招へい助成）

招へい者：志田泰盛（次世代研究者育成センター）

2012年2月5日～17日の間、「マラヤラム文字サンسكريット語写本読解研究」というプロジェクトとして、南インド・ケララ州のケララ大学東洋学研究所・写本図書館（Oriental Research Institute & Manuscripts Library）のプロジェクト・アシスタントを務めるシャジー P. L. 氏を本学に招聘した。

招聘の目的は大きく2つである。1つ目は、招聘者が現在校訂中の古マラヤラム写本で書かれたテキストの難解な箇所を共同研究として解説すること。2つ目は、京都大学においてマラヤラム文字写本の読解演習を開催することで、今後マラヤラム文字の写本を扱う可能性のある学生にその解説方法を教示いただくことである。

シャジー氏は、大学卒業直後よりケララ大学付属の写本図書館に着任したため、学位こそ持たないが、35年以上に渡って南インドの古写本の蒐集・同定・カタログ化・保存といったプロジェクトに携わっている。我が国のインド学研究者との交流も30年近く続いている。招聘者自身もこれまでに3度ケララ大学の写本図書館に調査に訪れた際、写本撮影等に関わりがあったが、今回はある程度まとまった期間日本に滞在いただき、若手研究者にマラヤラム文字を習得していただくことで、我が国のインド古典学研究的基礎力の向上を図った。

ケララ大学の写本図書館は、インド最大級の収蔵量（約6万5千点）を誇り、現在も地道な調査によりそのコレクションは増え続けている。しかも、8割以上が筆写年代の比較的古い文献的価値の高い貝葉写本であるが、そのほとんどがマラヤラム文字（言語はサンسكريット語・マラヤラム語他）で書かれている。その解説のためには、たとえサンسكريット語を学んだ研究者であっても新たに文字の習得が必要とされる。

2月7日に京都大学吉田泉殿において"On the Malayalam script and the manuscript collection of the Oriental Research Institute and Manuscripts Library, University of Kerala" という講義では、ケララ大学の写本コレクションの紹介及びマラヤラム文字の歴史的発展について説明いただくとともに、実際の貝葉写本の取扱も実演いただいた。近年は鮮明なカラ



一写真で見る機会が増えたとはいえ、通常はインドの写本機関に行かなければ見られない実物の写本は、学生にとっても貴重な経験になったと思われる。

また、2月8～9日に同じく京都大学吉田泉殿で開催したマラヤラム文字解読演習を開催した。演習は2日間に集約したが、基本文字、数字、数字代用文字などを効率よく習得することができ、最終的に多くの学生が実際の写本を解読できるようになっていた。



吉田泉殿における講義・演習には、京都大学文学研究科インド古典学の学生だけでなく、本学文学研究科、人文科学研究所、東南アジア研究所の先生方、そして、京都産業大学の先生や学生にも参加いただいた。

上記の講義・講演の他、招聘者が現在本学の白眉プロジェクトの下で校訂中の古典インド聖典解釈学派の哲学文献の写本の難解な箇所について解読を共同で行った。校訂にあたっては7本の1次資料を使用しており、そのうち3本の資料が古マラヤラム文字写本であるが、写本自体に相当の損傷があるだけでなく、文字の訂正も多く、解読が難しい箇所が多く残されていたが、様々な書体に精通しているシャジー氏との共同研究の中で、そのほとんどの箇所を明確にすることができた。



現在招聘者が校訂中の作品を含め、インドにおける哲学的な伝統は、古くはバラモンという知識階級にのみ閉ざされていたが、コロニアル期、そしてポストコロニアル期に至ってインド以外の世界にも開かれ、西洋においては東洋への憧憬を抱く思想家も出現するようにもなった。

しかし、近年はグローバル化と資本主義とがインドにも浸透する反面、インド人にとっても古典研究を敬遠する傾向が顕著になってきている。インド各地の図書館員ですら、その土地固

有の古写本の文字を読めないことも稀ではない。ケーララ大学写本図書館はそのようなインド国内の古典研究界の現状の中で、所蔵写本の質と量だけでなく、写本を保存・管理するスタッフに関しても充実しているといえる。そのケーララ大学写本図書館よりシャジー氏を招聘できたことは、我が国のインド学研究の基礎力を向上への追い風になったと考えているが、その一方で本国インドにおけるインド古典学分野再興への一助となることを期待している。